



科学・技術と世界観

中部大学 学長 山田 和夫

昨年の10月、IAU（国際大学協会：パリに本部を持つ国際的な大学間の連絡・調整機関）の会議でエジプトを訪れる機会がありました。アレキサンドリアでの会議のあと、古代エジプトの史跡等見学のため、ほんの数日エジプト南部を旅しました。

この旅で印象に残ったのは、アスワン・ハイ・ダムのことです。このダムはエジプト南部、アスワンに近いナイル川に建設された世界有数の巨大なロックフィルダム（コンクリートでなく石塊を材料とするダム）です。そして、その貯水池はナセル湖とよばれる世界第二位の人造湖で、その延長はスーダンとの国境を越えて500キロにもおよぶと聞きました。

この巨大なダムは、灌漑・発電・洪水調節を目的として、当時のソ連の資金・技術援助のもとに、10年の歳月を費やして1970年に完成されたのですが、地元での評判はどれも芳しくないようです。世紀の大事業といわれ、水没する古代遺跡の保存のために、国連のユネスコが中心的役割を果たしたこの巨大なダムができてからは、確かにナイル川の氾濫はなくなりました。ところが巨大なナセル湖のため、その湖水→蒸発→降雨の循環が起こって、しばしば雨が降るようになったのですが、これが砂漠文化の民にとってみれば中途半端な雨で、大変評判が悪いわけです。そのうえ、ナセル湖の水がよどみ、大量発生した貝にある種の住血吸虫が寄生するようになり、これが人間の皮膚から入って、現地の人々の間に新しい風土病を引き起こしているというのです。

このアスワン・ハイ・ダムの話は、科学・技術のあり方について貴重なことを教えてくれていると思います。科学・技術の進歩によって、私たちの生活は確かに豊かになりました。しかし、これまでの科学・技術は、どちらかといえば「人間にとってそれが何であるのか」という価値判断を持ち得なかったのではないのでしょうか。アスワン・ハイ・ダムは、近代の科学・技術の粋を尽くした巨大プロジェクトであったと思います。しかし、真に現地の“人間”のことを考えた科学・技術の適用であったのかどうか、ほんの行きずりの旅行者の私にも考えさせられるものがありました（アスワン・ハイ・ダムで目についたのは、外国からの観光客や見学者ばかりで、現地人はそれを管理している軍隊の人たちだけでした）。

科学・技術が加速的に進歩・発展するなかで、これまでその専門家たちは、優れた能力を持てば持つほど、彼の才知は彼という人間を離れて方向性を定め得ぬ危うい独り歩きを余儀なくされていたのではないのでしょうか……第二次大戦中、ナチスのロケット兵器V2号を開発し、戦後アメリカへ連行されて、人工衛星エクスポローラー1号を設計したフォン・ブラウンは、まさにそのような才知の人であったと思います。

しかしながら、これだけ科学・技術が高度に発達した今は、それが人間にとって、人生にとって、どういう意味を持つのかという視点が欠落しては、文明栄えて人間減ふということにもなりかねないと思います。すなわち、これからの科学・技術には、世界および人生に対する包括的で深い世界観が不可欠になってくると思います。

フランスの街々では、100年前に比べて緑がはるかに多くなっていると聞いたことがあります。これからの科学・技術は、大気や水の汚染防止のように“負”を減じようとするところから一歩進んで、フランスの例のように、人類のコンフォート（快適さ）のために、“正”を付加しようとする積極性が必要になってくると思います。そのためには科学・技術には世界観を包含した広い視野が求められてくると思います。

変圧器をはじめとして、私たちの日常生活に密接な関係をもつ製品・技術を開発・蓄積されてこられた愛知電機株式会社の技術陣のご健闘に深い敬意を表するとともに、今後とも私たちのウエルフェア（福祉・厚生）向上のため、より一層のご精進をお願いする次第です。